

# 都市の資源配分論から生活における資源の編成過程へ

——サンドラ・ウォルマンの論考に着目した研究枠組みの構築——

堀江 和正

生活をめぐる問題として、人々が財やサービスの存在を認知し、どのように利用するか判断し、実際に活用するまでの困難が、さまざまな研究で指摘されている。そうした問題群を論じる枠組みを構築するため、本稿ではまず都市社会学における資源論を検討した。結果、社会的な資源配分とミクロな都市生活を接合し、かつ資源への意味づけ過程を捉える枠組みの不在が明らかになった。この課題を克服するため、英国の都市人類学者サンドラ・ウォルマンの論考を検討したところ、「編成的資源」概念の導入による資源概念の拡張と、資源システムの境界の可視化という2つの研究視座が析出された。最終的に、人々が認知的資源を蓄積し、財やサービスを生活の中に取り込むことで成立している生活という過程を、資源配分による一定の拘束と、資源システムの重層を視野にいれながら捉える、という研究枠組みが提示された。

## 1 生活と資源をめぐる論点

私たちの生活は、種々の財やサービスを組み合わせていくことで成立している。生活をめぐる問題として今日さまざまな研究で指摘されているのは、財やサービスの供給以上に、財やサービスを自身の生活のなかに取り込み、活用する過程における困難である。

たとえば生活困窮者への支援体制をめぐる稲月正は、(1) 社会的孤立化に対応した支援体制の弱さ、(2) 総合的な支援体制の弱さ、(3) 自分が社会にいることの意味、役割、希望を感じさせてくれる支援の弱さ、(4) 社会づくりを視野に入れた支援体制の弱さ、を指摘している。(1)は、「生活困窮者本人が適切な形で支援の仕組みを継続的に活用するためには、困窮状況にある人を見つけ、制度につないで適切なコーディネートをしてくれる人の存在が重要である」(稲月 2014: 38)が、そうした役割を担ってきた地縁・血縁・社縁が弱体化しており、制度的に対応する仕組みづくりも進んでいないという問題である。(2)は、生活困窮の背後にありうる障がい、生きる意欲の喪失、基礎学力の低さなどの複合的な課題に対応するためには複数の制度・サービスをつなぎ合わせる必要があるにもかかわらず、それを可能にする総合的な相談・支援の枠組みが作られていないという問題である。(3)は、制度やサービスを利用する前提として、当事者が自らの存在意義を感じることや将来への希望を持つことが重要であるにもかかわらず、そうした側面を支援する仕組みが存在しないという問題である。これらの課題に答えていくために、地域社会が受け皿となるよう働きかけていく必要があるというのが(4)の指摘である(稲月 2014: 38-40)。多元的に提供される財やサービスへのアクセシビリティ、財やサービスの組み合わせ方、生活における意味づけといった論点が浮上するなかで、地域という場の役割へも注目が集まっていることが読み取れる。

また福祉の領域における「処遇困難事例」も、同種の問題群だといえる。井上信宏によれば、「処遇困難事例」は(1)「何らかの支援が必要な状況にありながら、支援を受け入れようとしなない『接近困難』」、(2)「家族関係が複雑で問題を抱えていたり、地域や社会とのつなが

りが希薄で、必要な社会サービスの利用ができていない『関係困難』、(3)「日常生活において、保健・医療・福祉・介護の各制度を横断するサービスが必要とされるが、供給サイドの連携が不十分なために、ニーズとサービスが結びついていない『援助困難』」に大別できる(井上 2011: 114)。こうした問題は、サービスそれ自体は存在するものの、サービスへの認知やアクセス、サービスの組み合わせをめぐる課題によって、問題の解決が困難になっている事例だと見ることができる。

これらの問題群については、今までのところ個々の事例に即した研究が積み重ねられている状況である。こうした、財やサービスを意味づけ、生活のなかに取り込み、活用する過程における困難さを社会的に理解するための枠組みを構築することが、本稿のもっとも大きな関心である。

本稿では、その枠組みの構築にあたって、まず都市社会学の知見を参照する。都市は人口が集積する場であり、財やサービスが集積する場である。都市社会学において、人々の生活と財やサービスの関係は、主要な探究課題となってきた。そこでは個別具体的な財やサービスに関する研究というよりも、財やサービス一般が都市生活においていかなる位置を占めるのかについての考察がなされてきた。生活主体がさまざまな財やサービスを自身の生活のなかに取り込み活用する過程を捉えようとする本稿にとっては、個々の財やサービスを越えた形で財やサービスに関する論考を蓄積してきた都市社会学の知見が重要な先行研究となる。

特に本稿では、都市社会学において財やサービスに関する研究を駆動してきた「資源」という概念に着目する。そこでの「資源」とは、希少性を持つ財やサービスとして捉えられ、その社会的な配分のあり方が問われてきた。しかし、今日浮上している問題群、すなわち財やサービスを自身の生活のなかに取り込み、活用する過程における困難を、従来の「資源」概念によってのみ捉えることはできない。配分される財やサービスとしての「資源」の研究との接合を図りつつ、いかに「資源」概念を財やサービスへの意味づけをも含みこむ形で拡張していくか。本稿を貫くのは、こうした問題関心である。

人々が財やサービスを認知し生活のなかに取り込む過程において生じる問題を、「資源」概念を用いることでどのように捉えることができるか。本稿ではこの問いに答えるため、段階的にいくつかの問いに答えていくことになる。2節では、都市社会学において資源概念がどのように用いられ、どのような研究がなされてきたのか、既存の研究枠組みでは何をとらえ損ねるのか、なぜそうした偏りが生じたのかを論述する。ここで着目するのは、いわゆる新都市社会学の一部として位置づけられてきた資源配分論と、森岡清志によって提唱された都市的生活構造論である。3節では、2節で明らかになった課題を克服するため、英国の都市人類学者であるサンドラ・ウォルマンの論考を検討する。ウォルマンが用いた研究枠組み・概念群を参照することで、いかに課題を克服しうるのかが論述される。以上をうけて結論では、本稿が構想した研究の枠組みが提示され、財やサービスを認知し生活のなかに取り込む過程に生じる問題に対し、いかなる捉えなおしが可能になるのかが述べられる。

## 2 都市社会学と「資源」

### 2-1 資源配分への着目——新都市社会学

日本の都市社会学においては、いわゆる新都市社会学の導入という流れのなかで、「資源」概念へ注目が集まった。まずは新都市社会学における資源への着目と、その日本での受容を概観しておこう。

新都市社会学は、英国の社会学者を中心とするネオ・ウェーバリアンによるものと、マニュエル・カステルらを中心とするネオ・マルキストによるものとの、おおきく分けられる。英国でのレックスとムーアによる研究が前者の嚆矢であるが、その問題意識は「1960年代後半以降進んだ大都市の衰退と貧困問題に対し、それまでの公共的な財の供給と分配のあり方が問題視されることになり、財の配分をめぐる社会的葛藤の都市論が提起された」（西山 1986: 149）というものであった。財の配分をめぐる問題が、新都市社会学の問題意識を規定していたことが重要である。

レックスらによる研究では、バーミンガムの都心周辺地区（遷移地帯）における住宅獲得が主題化された。ここで、住宅は希少資源として位置づけられる。この希少資源としての住宅へのアクセスをめぐる不平等が、レックスらの主要な論点だった。レックスらは住宅階層 Housing Class という概念によって、住宅へのアクセスをめぐる不平等、すなわち住宅市場における人々の位置・状態を表した。住宅階層は、労働市場において個人が占める位置（収入）にも規定されるが、移民労働者のあいだに見られるように、労働市場での位置が同じでも、住宅へのアクセシビリティが異なる場合がある<sup>1</sup>。住宅階層間のコンフリクトが、都市の中心的な社会過程だというのが、レックスらの主張であった（園部 2001: 12-3）。レックスらは、こうした資源配分システムの背後にある地方の住宅局・計画局の官僚たちの不正な意識と行動の影響を指摘し、差別のない配分政策の必要性を主張した（西山 1986: 151）。

こうして、都市社会学に「希少資源の配分と使用」という主題が設定されることになった。この主題を発展させたのが、やはり英国の社会学者であるレイ・パールだった。パールは、人々の生活機会は住宅を含むさまざまな資源や施設の偏った配分によって社会的・空間的に拘束されていると考え、都市社会学の主要な課題を、都市の資源に対する社会集団間のアクセシビリティの相違に定める。パールの社会学はそのため「拘束の社会学」と呼ばれる。この不平等を生み出す存在としての、希少資源を管理・操作する地方行政官やディベロッパー、金融保険会社などの「アーバン・マネージャー」にパールは着目し、そのイデオロギーや役割を研究対象とした（園部 2001: 13-4）。都市の機能や空間的範囲が拡大する時期にあって、都市に投入される国家の資源は巨大で、その配分方法は重要な問題であった。そのなかで都市官僚制に着目した分析方法を示したのが、上記の「アーバン・マネジャリズム論」であった（武田 2009: 169）。

園部雅久は、パールによる研究を「都市の希少資源や施設への接近に対する社会的、空間的拘束性を従属変数として、それを独立変数としての都市システムの管理者や制御主体の行為によって説明するという形」だと要約し、「シカゴ学派都市社会学がほとんど取り上げてこ

なかった機会の不平等性と権力の問題を前面に据えた点で着目に値する」(園部 2001: 14) と評価する。いっぽう、批判点として、ローズマリー・メラーの「資源を統制し配分する人々に照準があわせられ、統制を受けている人々がその視野から消えさせているのである。プランナーではなくむしろそうした人々が、コミュニティに適応し、対応し、活用する様子をもっと間近に観察すべきではないだろうか」(Mellor 1975=1983: 29) という指摘を引用しつつ、「生活機会の不平等に関する物質的条件や指標化を強調するあまり、都市で生活する人々の世界に目を向けることを忘れていた点」(園部 2001: 14) をあげている。

この批判は、パールの研究枠組みを発展させるうえで確かに重要だと思われる。資源が不平等に配分され、人々の生活機会が拘束されているとして、その拘束のなかでいかにして人々が資源を認識・評価し、生活に取り入れていくのかが明らかにされなければ、資源の配分と生活の実相とを結びつけることはできないからである。しかし、少なくとも日本の都市社会学において、この批判を直接的に克服するような取り組みはなされていない。もちろん、「都市に生きる人々の世界」を重視するエスノグラフィーそれ自体は蓄積されてきた。しかし、都市の資源配分に関する研究との接続を図りながら、都市で生活する人々の具体的な様相を資源論として描くための枠組みは提示されていないのである。

都市の資源配分論を生活の実相と結びつけるための枠組みが準備されてこなかったことの原因の一端を、新都市社会学が都市を行政や国家といったより大きな構造のなかで捉えるための枠組みであるとパッケージ化されてきた点に見て取ることができる。新都市社会学は、シカゴ学派都市社会学が「自らの方法的枠組に裏うちされないままにひたすら調査テーマを拡散し、そのために〈全体性認識〉を放棄し『無理論的』性格を強めていること」、「国家とか体制を素通りしている点」(吉原 1986: 3) への挑戦として出現してきたことを軸として理解された。新都市社会学という潮流に位置づけられた研究は、都市をより大きな構造のなかで理解できるかどうか、という視点から評価される傾向にあったといえる。そのために、パールの資源配分論をミクロな都市生活の理解に貢献する方向で深化させていこうという動きは出にくかったのだと考えられる。

園部は、パールが「資本主義社会」の問題に目を向けたことを媒介として、カステルへと議論を接続している。パール自身がアーバンマネジャリズム論を再検討するなかで提示した、「都市をサブシステムとする、より大きな資本主義社会をよりよく理解しないかぎり、都市のよりよい理論的理解は不可能だ」(園部 2001: 14) という論点は「伝統的都市社会学において欠落しがちな視点ただけに重要であり」(園部 2001: 15)、カステルはこの点をより強調したというのである。

カステルは、通常は国家のような公共部門によって提供される、交通や学校や医療のようなサービスに着目し、その集団的な消費を集会的消費として概念化した。カステルが問題化したのは、政府による集会的消費手段の管理と、都市問題の政治化、新しい社会運動の展開である(園部 2001: 15-6)。ここで園部は、新都市社会学をレックス・ムーアからパール、そしてカステルへの論点の深化の過程、全体社会への焦点化の過程として描いている。同様の認識は、アーバン・マネージャリズム論の「資源配分論」がカステルの「国家介入論」へと

「ふかめられていった」（吉原 1996: 253）という記述にも見て取ることができる。

ここまで見てきたような、「新都市社会学」をよりマクロな都市社会構造の解明に向けた流れとして理解する傾向のなかで、都市の資源配分とミクロな生活とを接合するような議論は活性化してこなかった<sup>2</sup>。しかし、資源配分とミクロな生活を接合する枠組みなくしては、今日前景化している困難、すなわち人々が財やサービスを意味づけ、利用し、生活を成り立たせていく過程における困難を捉えることはできない。都市における資源配分のなかで生活する人々を、いかにして理論的対象として捉えるかが問題になる。

## 2-2 資源の意味づけへの着目——都市的生活構造論

ここまで見てきたように、都市社会学において資源という主題は「配分」を中心に論じられてきたが、その成果をミクロな都市生活の過程へと接続する枠組みは用意されてこなかった。配分という論点は重要なものだが、生活の局面から見ると、資源は人々によって認知され、利用の是非が何らかの基準により判断されるという意味づけの過程を経て、はじめて生活に取り込まれる。この過程を捉える枠組みなくしては、資源配分論と具体的な生活を結びつけて理解することはできない。

「現実の財・サービスの獲得にあたっては、各主体のもつ戦略的資源の種類や量が大きな規定力をもつだけに、実際にはこれら戦略的資源の獲得方法についての議論がなければ、配分の結果など論じてあまり意味がない」（町村 1986: 124-5）という問題それ自体は認識されていたものの、資源をめぐる主体の問題に取り組んだ研究は多くない。そのなかにあつて、森岡清志が「都市的生活構造論」という主題のもとで提出した研究枠組みは、人々による資源の認知や評価を問題化しようとした点で、検討すべきものである。以下、森岡の研究を再検討し、その到達点と課題を明らかにする。この作業によって、研究枠組みの構築にあたって留意すべき点が明らかになる。

森岡の問題意識は、「資源処理をともなう生活問題の解決・処理行為のパターンとして社会参加構造を把握し直」（森岡 1984a: 85）そうというものであった。ここで森岡は「人は他者と結びつき、また財を受け、何らかのサービスを提供されて初めて、その生活を営むことができる」（森岡 1984a: 85）点に着目する。そして、「生活行動に必ずともなう資源処理が、個人の選択的・選好的処理であることに注目し、そこに社会への個人の主体的かわりをみ」（森岡 1984a: 85）ようとした。森岡は「都市住民が、自己の生活目標と価値体系に照らして社会財を整序し、それによって生活問題を解決・処理する、相対的に安定したパターン」（森岡 1984a: 86）を「都市的生活構造」とし、研究枠組みの構築を図った。

ここで森岡は、いくつかの概念を用意している。第一に、「社会財」である。これは「社会的資源一般のなかから、生活主体が特定の意識に照らして独自に切り取り配置する部分的資源、あるいは主体にとって意味ある資源」（森岡 1984a: 87）だとされている。ここで「社会的資源」というのは、当該社会に固有の「弁別メカニズム」によって意味付けられ、「不連続的に個人の周囲に配置されているサービス群と提供主体群」を指している。これは端的には「社会が意味づける資源」である。社会の水準で意味を付与された社会的資源に対し、個人が意味づけをおこなったものが「社会財」なのである。

個人＝生活主体は、自己の周囲に広がる社会的資源を、彼の意識に照らして、それぞれ独自に切り取り配置している。たとえば、他者は社会的資源の一つとして、社会的評価体系のなかに位置をもつ他者である。しかし個人は、その位置づけを、そのまま受容しない。彼は、彼にとって重要な他者を重要なサービス提供主体として、独自に識別し、選別し、切り取り配置換えしている。すなわち他者を、彼の社会財として、社会的資源とは別個に独自に形成しているのである。(森岡 1984a: 88)

こうして意味づけられた社会財を動員して、個人は生活問題を処理する。この過程が、「社会財の整序」として概念設定される。「社会財を認知的、評価的、指令的に選択処理しつつ、生活問題を解決・処理」する社会財処理過程が、「整序化」である。森岡によれば、「整序」という表現には、「生活問題の解決・処理にともなう社会財処理が、とくに選別的・選好的性格を有し、主体の発露を認めうる」(森岡 1984a: 88) という含意が込められている。社会財の整序化は、4つの行為水準に整理されている。それは①生活問題の認知・評価、②問題処理に適する社会財の動員、③社会財の維持・管理、④新しい社会財の獲得、である(森岡 1984a: 88)。また、生活問題処理について意思決定主体と実行主体の類別も提案されている(森岡 1984a: 99)。

これら森岡による問題の設定と概念の提示は、資源に対する意味づけの重要性を明確に指摘し、それを社会レベル／個人レベルに区別した形で周到に論じている点で、評価すべきものである。

いっぽう、森岡の提起した研究枠組みにおいて見えない部分も多い。その最たる点は、個人が資源をいかにして意味づけるのか、その過程は問われないままになっていることである。森岡は「問題のタイプ・社会財の種類・親近性をファクターとする整序化パターンを抽出し、これを意識と結合していくこと」(森岡 1984a: 93) を課題だとし、その後も「整序パターンの抽出」が第一義的な研究課題とされた。「個人がいかなる社会財を選好するのか、そしてそれはいかなる要因によってか」が探究課題とされ、その「要因」は「個人の意識や個人の諸属性(性・年齢・学歴・職業・収入・居住年数・子供の有無・世帯内地位など)のような、とりあえずは個人に帰属される要因と、この要因から導かれる社会構造的要因、また生活様式や物理的・生態的環境のような集会的・生態的要因」として把握された(森岡 1985: 72)。このとき「いかに」を理論的に問うことはなされず、その過程への考察は類推にとどまらざるを得ない。

この「パターン」への関心の集中は、当時の時代状況とも関連して都市社会学を規定していた問題意識に由来すると考えられる。森岡は「専門機関の提供するサービスによる生活問題処理のシステムが形成され、これに対応して、個人の社会財整序も専門的サービスの整序に片寄っていくこと、すなわち都市住民が専門的処理に高度に依存することに由来して」、「処理過程の不透明性、個人化の進展、疑似環境の肥大化、人間関係の省略化」という問題群が発生しており、「専門的処理に比して、住民による制御が可能な相互扶助的処理を、この専門的処理システムの内部に組み込むことが必要」(森岡 1985: 73) だと述べる。これは、都市的生活の特質を「問題の自家処理能力の低さ」と「共通問題の専門機関による専門的処理」に

見出す倉沢進（1977）の都市的生活様式論を理論的支柱とした、当時のコミュニティ形成論の問題意識に他ならない。そこで提唱されていたのが、専門的処理の弊害を相互扶助との結合によって克服する共同生活のあり方としての「コミュニティ」だったのである。そうした生活のあり方を実現するために、「当面、相互扶助的組織・関係の実態と、そこにおいて処理される生活問題のタイプを把握する必要」（森岡 1985: 73）があるという認識から、人々はそのような問題の処理を親戚・近隣・友人等の相互扶助に頼り、どのような問題の処理を専門機関に頼るのかという選択・選好パターンの記述が課題として前景化する。具体的には、「あなたは、外出などで老人や子どもの面倒をみてもらう必要がおこったとき、誰に頼みますか」という問いに、「親戚／近所の人／職場の人／友人／保育園・託児所・ベビールーム／家政婦・ホームヘルパー・ベビシッター」から選択させるような設問を種々の生活上の問題について作成し、回答の比率を記述するような方法である（森岡 1985: 95）。ここにおいては、事実として生活問題処理がどのような関係性の相手によってなされているかの把握が中心課題となっている。理論的には想定されていた「社会財を認知的、評価的、指令的に選択処理」する過程はブラックボックスとなり、表面化している生活問題処理のパターンのみが実際には測定されることになる<sup>3</sup>。森岡の研究は、人間関係の形態を分析するパーソナル・ネットワーク研究として収斂し（森岡 2013）、資源への意味づけという問題設定は退いていった。

そのほかにも、森岡の枠組みは人々の生活を捉えるうえで限界を抱えている。それは、個人への視点の集中によって、家族のなかの個人、地域のなかの家族・個人といった形で人々の生活を捉えられないことである。たとえば、森岡の枠組みにおいて、個人と世帯は同一視されている。その理由は、たとえば町内会で意思決定された生活問題処理について、実行主体は世帯員全員か個人か「現実に様々」であって、「両者を分離する積極的意味もない」からだという（森岡 1984b: 7）。しかし、現実の多様さそれ自体も重要な探究対象である。資源への意味づけ・動員に際して、家族内でいかなる分担がなされているか、そこに負担の集中や何らかの葛藤がないか、という点は論点となりうる。また森岡は、町内会等によるものなど、意思決定主体が共同的である生活問題処理は生活様式論の課題であり、生活構造論の対象は個人が生活問題処理の意思決定主体である場合に限定されるという（森岡 1984a: 99）。しかし、個人は一生活者であるのと同時に共同的な意思決定にも関わっているのもであって、とくに町内会のような対象を考えれば、むしろ個人による資源の意味づけと共同的な資源の意味づけは連続的にとらえたほうが、より人々の生活における資源の意味を把握できるだろう。個人による資源の意味づけ・動員と、共同的なそれが、対立することも考えうる。この点で、資源をめぐる重層的な社会関係を捉えられる研究枠組みが求められる。

個人の社会に対する「主体性」を探ろうとする、生活構造論に由来する問題意識の影響により、個人の主体的な選択・選好が強調されている点にも注意を要する。たとえば情報の欠如によってある資源の存在が認知されていない場合でも、それを「選択」や「選好」の結果だと解釈してしまいかねない。「社会的資源」の見取り図が、当該社会の全個人に共有されているならば、すべてを個人の「選択」や「選好」に帰することが可能かもしれないが、そういった事態を想定することは難しい。資源に対する意味づけがある程度共有されていること

はあるだろうが、その場合でも、「社会的資源」への意味づけが共有されている範囲は、「社会」一般ではなく経験的・分析的に設定されるべきである。

ここまで見てきたように、森岡の枠組みにおける課題は、資源への意味づけの過程が問われていないこと、個人と世帯、また個人・世帯と地域との関係を問うための視座がないこと、「選択」や「選好」への強い焦点化により、情報の欠如といった事態が不可視化されかねないこと、であった。

### 3 研究枠組みの構築——サンドラ・ウォルマンの論考に着目して

#### 3-1 “Eight London Households”

ここまで検討してきた都市社会学における資源に関する研究の課題を克服し、研究枠組みを構築するため、本節では英国の都市人類学者サンドラ・ウォルマン (Sandra Wallman) <sup>4</sup> が1984年に発表したエスノグラフィーである *Eight London Households* (邦題『家庭の三つの資源』) に着目する。

*Eight London Households* はロンドンのインナーシティのバタシー・LARA 地区に住む八家族の生活を調査したエスノグラフィーである。ウォルマンの問題意識は、インナーシティへの一般の注目は「貧困、インナーシティ、マイノリティの民族的地位という三つの要素を一緒くたに関連づけている」(Wallman 1984=1996: 16) が、「民族の差異を問題にしたりインナーシティの画一性を云々することが、都市生活の実態をますますわからなくさせているのではないか」(Wallman 1984=1996: 17) というものであった。これは「民族」といった外形的なカテゴリーが人々の生活を全面的に規定しているという無自覚な前提の相対化である。一見類似した家庭であってもその生活戦略が大きく異なっていることを示すため、「(I) その地域に最低五年は住んでいること、(II) 他に南ロンドンに家庭をかまえている親族がいること、(III) 家に十六歳以下の子どもがいること、(IV) 社会的、経済的地位が同じカテゴリーに該当していること、(V) 年月とともにたびたび出くわす危機(誕生、死、転居、結婚、解雇などにまつわること)を経験してきたこと」(Wallman 1984=1996: 69) という共通点をもった家庭が調査対象として選択されている<sup>5</sup>。

本稿がウォルマンのエスノグラフィーに着目する理由は、その枠組みが家族研究のみならず、人々の地域生活の過程を描くうえで示唆に富んでいるからである。以下、「資源概念の拡張」、「資源システムの境界の可視化」の順に、その射程を検討する。

#### 3-2 資源概念の拡張

ウォルマンの研究枠組みにおいてまず重要なのは、構造的 structural 資源に対置される編成的 organizing 資源という概念の導入である。その狙いと意義について、詳しく見ていこう。

ウォルマンは家庭を「資源システム」と見る。ウォルマンが強調するのは、「いかなる資源の価値も固定化されたものではない」(Wallman 1984=1996: 42) ことである。親族の結びつきや民族の出自は、ときには価値のある資源となり、ときには負担となる。あるいは家庭の経済やアイデンティティに結びつかないこともある。総体的な資源システムとして家庭を見る

と、「いかなる資源の有用性もそのとき生じている他のことによって決まるので、資源そのものがいくらあっても、その有用性と実際上の価値とはかかわりがない」(Wallman 1984=1996: 44) ことが把握される。

このような資源システムとしての家庭において、いかにして資源は「有用」たりうるのか。ウォルマンは「資源」概念の問い直しから、この問題に接近する。経済学に由来する古典的な資源概念を構成するのは物質的な対象であり、土地・労働・資本がその典型である。しかし、そうした定式化は「生活のおびただしく多様な現実にも目を向けていない」(Wallman 1984=1996: 47)。資源の「管理」といった問題を考えればわかるように、「資源という概念の領域には、認知、技術、象徴的な構造、組織的な戦略、つまり構造とか戦略に関係のあるあらゆる考えかたをふくめても少しもおかしくない」(Wallman 1984=1996: 47) のである。

こうして資源概念を拡張する形でウォルマンが導入するのが、編成的資源という視座である。古典的な資源である土地・労働・資本は、それらによって「その時期や場所に役に立つ行為の枠」(Wallman 1984=1996: 48)、すなわち「客観的構造」が決まるという意味で構造的 structural な資源だとウォルマンは規定する。これら物質的な資源に対して、客観的な構造の枠内における生活の編成 organization に関わる資源を設定することができる。これが非物質的な編成的 organizational 資源であり、ウォルマンによれば高度に産業化された都市環境において、その要素は時間・情報・アイデンティティである。この編成的資源の概念によって、「環境の制約とうまく折り合うこと、つまり、人がチャンスに出遭ったり、問題の解決にあたりたり、役に立ちうる機会をうまく利用するといったこと」(Wallman 1984=1996: 49) が説明可能になる。

ウォルマンによる資源概念の定式化は、いかなる意義を有しているのか。パールの「拘束の社会学」との対比から考えてみよう。パールの主要な着眼点は、資源と施設の配分によって人々の生活機会が制約を受けることだった。そのため、配分に影響力を有するアーバン・マネージャーのイデオロギーに、具体的な研究対象が定められた。パールが着目していたのは、ウォルマンがいうところの構造的資源の、地域ないし社会層による配分の偏りだといえる。構造的資源の付置状況によって、生活の客観的な構造が決定される。パールのいう「拘束」は、ウォルマンのいうところの「構造」に対応すると考えてよい。

パールが主張しているのは、資源の配分状況による、生活機会の制約である。これは、資源の配分状況によって生活のあり方が全面的に決定されるという主張ではない。「生活機会」の「制約」という問題設定によって、生活が資源配分により全面的に決定づけられるという短絡は回避されている。

そしてウォルマンは、編成的資源のあり方によって、同じ構造的資源の制約下においても生活の実相はきわめて異なったものになりうることを主張している。パールが主題化したところの(構造的な)資源配分による生活機会の制約と、具体的な生活の実相との間は、編成的資源概念の導入によって接続可能になるのだ。ウォルマンがおこなったのは、パールの着目したような構造的資源の付置に関する条件を統制したうえで、編成的資源の重要性をきわ立たせる作業だったともいえる。ウォルマンは、家庭への調査に先立って、「たとえば商店、耐

久消費財、交通状況、住宅事情などはいったいどうなのか、という統計的、社会的、地理的な調査」(Wallman 1984=1996: 73)によって、構造的資源の状況を明らかにする必要があると述べているが、これは地域に作用する「拘束」の調査だといってよい。構造的資源の配分の研究は、編成的資源という視座と組み合わせることで、生活という過程と結びつくのである。

そしてウォルマンは、森岡の枠組みにおいては問われないままになっていた、資源への意味づけの過程を捉えようとしている。「編成的資源」という明確な主題化によって、この点が論考において中心的な位置を与えられていることに、まず着目したい。ウォルマンは、資源への意味づけがいかなる過程としてなされるかを明らかにしている。森岡が着目し説明しようとしていたのは、特定の生活問題の解決にあたって、個人が現在どのような資源を用いようと考えているのか、その表出されたパターンであった。対してウォルマンが着目したのは、ある家庭が過去の生活歴のなかでいかにして資源への意味づけを形成し、結果として現在の生活上の課題に際してどのように資源を評価し、生活に取り入れるのかという、時系列的な過程である。生活における認知や評価、構えといったものを編成的な「資源」として概念化することにより、その形成の過程、すなわち編成的資源の蓄積の過程を問題化することが可能になっているといえる。

ウォルマンがこうして問題化した、編成的資源の形成と効果とを、調査を通じて明らかにするために用いた方法も評価すべきである。調査においては以下の4つのおおまかな設問が設定されていた(Wallman 1984=1996: 70)。

- ① あなたは、どのように最近の危機に対処しましたか。
- ② あなたは、働く生活をどのように過ごし、いままで過ごしてきましたか。
- ③ あなたは、時間をどう使っていますか。
- ④ あなたのつきあいで大切な人たちは、誰で、どこに住んでいますか。いつ、どんなときに、なぜ、大切なのですか。

上記が、家庭の母親を基本的なインフォーマントとしながら調べられた。いずれも重要な設問だが、ここでは②の職業歴に着目しよう。インフォーマントに用意された記入用紙は、「それぞれの職業がどのようなものであり、どのようにしてその仕事につくことになったのか、やめたのはなぜか、そしてやめた当時ほかにどんなことがおきていたかといったことについて、答える側が記憶をよび起こしやすいように工夫されている」(Wallman 1984=1996: 75)のものであり、これは対象者がこれまでの生活歴のなかでどのように編成的資源を蓄積し、活用してきたのかを問うものになっている。すなわち、求人情報をもたらすような生活上の情報源をどのように形成してきたのか、雇用や金銭といった構造的資源に対する意味づけをいかに形成してきたのか、といったことを、総体的な生活歴のなかで理解できるのである。そうして家庭が蓄積してきた編成的資源が、いかに生活を作り上げているのかが、①の「最近の危機への対処」を通して理解される。たとえば病気で子どもの世話を頼まなくてはならないケースや失業といったケースに際し、家庭の築いてきた編成的資源を背景として、いかに構造的資源の生活への取り込みがおこなわれるかが記述されるのである。

編成的資源の構成要素についても検討しておこう。ウォルマンは編成的資源の構成要素が「時間・情報・アイデンティティ」だとしている。これらは確かに編成的資源を考えるうえで有力な手掛かりとなる。「情報」は、「あらゆる物質的、構造的な資源の用途や有用性を牛耳っている」(Wallman 1984=1996: 50) 点でその価値は大きい。具体的には、「人は情報を掌握することによって生活をコントロールしており、例えば職業の場合には募集元や採用方法、仕事内容、福祉行政サービスの場合には権利や申請の仕方、機関への接し方を知らなければ接近できない」(Wallman 1984=1996: 50)。「住んでいる長さとしての時間」は、地域におけるインフォーマルなネットワークへの参加の条件となり構造的・編成的資源へのアクセシビリティを大きく左右するし (Wallman 1984=1996: 53-4)、家庭がどの程度詳細に将来の計画を描くかといった点も含めた「時間の観念」次第で、同じような構造的資源の制約下でも生活のあり方は異なる (Wallman 1984=1996: 56-9)。民族・仕事・地域のうち、地域にどの程度「アイデンティティ」を見出しているかによって、生活において主要な位置を占める人間関係や活動も、将来設計も変わってくる (Wallman 1984=1996: 59-62)。たとえば情報への着目は、資源への主体的な「選択」や「選好」を強調する森岡の視点の問題点、すなわち情報の欠如によってある資源の存在が認知されていない場合でも、それを主体的な「選択」や「選好」の結果だと解釈してしまいかねない点の克服に有効だろう。そして時間の観念やアイデンティティは、森岡によっては捉えられなかった資源への意味づけ過程の内実の一端を示すものだろう。

しかし、編成的資源について、時間・情報・アイデンティティによって「簡潔に、しかも該当する対象の範疇をすべてカバーすることができる」(Wallman 1984=1996: 47) というのは、きわめて強力な仮定である。ウォルマンが資源概念の拡張に際して「認知、技術、象徴的な構造、組織的な戦略、つまり構造とか戦略に関するあらゆる考えかた」(Wallman 1984=1996: 47) を含みこむために「編成的資源」概念を導入したことを考えれば、「時間・情報・アイデンティティ」の3概念には対応しきらない要素も、編成的資源には内包されるだろう。たとえば森岡が目しようとした「産地直売や無農薬野菜の購入」に代表される選好、いわゆる「ライフスタイル」などは、民族・仕事・地域に代表される「アイデンティティ」という概念では捉えにくいにもかかわらず、構造的資源の枠内における生活を規定するもので、これは編成的資源と考えてよい。よって本稿では、編成的資源を「生活の編成に関わる認知的資源」として捉えたい。その構成要素は調査対象に応じて経験的・分析的に見出されるべきものとする。

パールらが着目したのは、資源配分のあり方によって人々の生活に課せられる拘束の形態であった。編成的資源という概念の導入が可能にするのは、こうした生活機会の拘束を踏まえつつ、人々がいかに資源を意味づけ、運用しながら生活を営むのかを分析的に捉えることである。資源への意味づけや運用が、これまで問われてこなかったわけではない。しかし、それを編成的な「資源」として概念化したことにより、形成の過程が明確に探究課題として位置付けられた。こうして、森岡の枠組みにおいては問われなかった資源の意味づけの過程を捉えることが可能になっている。

### 3-3 資源システムの境界の可視化

*Eight London Households* は家庭の生活戦略に着目したエスノグラフィーである。しかし、その「家庭」は外形的に定義されるのではない。家庭を「資源システム」として見るウォルマンは、家庭の境界、すなわち資源システムの境界はいかに分析的に、また経験的に設定するかという点に、きわめて自覚的である。このウォルマンの視座により、都市生活を重層的な資源システムという観点から分析することが可能になる。資源システムの境界が可視化されるのである。

ウォルマンが強調するのは、資源システムの境界は自明のものではなく、経験的・分析的に明らかにされるべきものだということである。資源システムとして家庭を見ると、その境界線は「二様に流動的」である。すなわち、「家庭のサイクルにそって経験的に変化するものだし、重きを置く資源のいかんによって分析的に変化するもの」(Wallman 1984=1996: 42)なのだ。これは、ある一つの家庭であってもその境界線が経験的・分析的に流動的だということ、異なる家庭ではその境界線のあり方が違うことはいままでのない。たとえば成人した子ども家族とさまざまな資源を共有し、一体的に運用しようとする家庭もあれば、そうではない家庭もある。

そして、資源システムとしての家庭は、資源の管理者 resource-keeper を持つ。このとき、「フォーマルに、つまりは法的にみとめられた世帯主が、かならずしもその家庭の資源をすべて管理しているのでもないし、家庭の生活を決める中心になっているわけではない」(Wallman 1984=1996: 39)。そうではなく、その資源ごとにある成員が資源の管理者となつて、「家庭の資源をとにかくもその家庭全体の蓄えとして守っている」(Wallman 1984=1996: 39) ののである<sup>6</sup>。

ここで、資源システムとして家庭を見るウォルマンの視座がどのような意義を持つのか検討しよう。「家庭」の範囲をあらかじめ定めず、資源システムとしての当該家庭がいかなる境界を持つかは経験的・分析的に見出されるべきものであるとするウォルマンの視座によって可視化されるのは、資源を編成するシステムの境界の存在である。ここで森岡の枠組みに立ち戻ると、そこでは「個人」と「世帯」は区別されていなかった。ここで見落とされてしまうのは、個人における資源への意味づけと、家庭としてなされる資源の動員に関する意思決定が、かならずしも一致するとは限らないということである。ウォルマンが指摘するように、家庭をそれ自体としてひとつのまとまりをもち、資源の管理者の指揮のもと構造的資源の枠内で資源を編成していく資源システムとして見るならば、家庭は個人とは独立した資源システムとして捉えることができる。これにより、個人と家庭との葛藤といった事態も可視化することができるのである。

ウォルマンが資源システムとして捉えるのは、家庭だけではない。地域もまた資源システムとして捉えられている。ここでも、ウォルマンの資源システムという視座により、地域というシステムの境界が可視化されることになる。

「我々」つまり「我々のもの」と呼ぶ資源を共有している人たちを定義する基準はどこにもなく、「我々」意識もたえず変わっている。しかし、その変わりかたはけっしてでた

らめではない。どんなレベルの社会プロセスも勝手には進行しない。地域の置かれた状況やその周囲でおきることがらとか、地域が提供する資源の範囲によって、いろいろな制約を受けるものなのである。(Wallman 1984=1996: 21)

ここでは、「我々のもの」と呼ぶ資源の共有を境界とする資源システムとして、地域が描かれている。その境界は、地域の置かれた状況や提供する資源によって規定されつつ変動していく流動的なものである。バタシー・LARA 地区は、国家的政策（住宅整備事業）によって新たに資源を付与されたことで、資源を共有する領域としての「我々」を確立させていった地域である。

「我々」とは、広義には、ここに住んでいる人たち全部をさしている。そして狭義の「我々」というのは、ここが住宅整備事業の地域指定を受けて、ひとつのコミュニティ（発足したのは少しまえにすぎないが、もとのからの伝統の力を受けついでいる）に認定されたときにすでに住民だった人たちをさしている。そのころたんに役所の地図に印がつけられたことから、この地区はとくべつの領域になった。そしてその地図を作成した側にとって、そのとき引いた境界線は、特定の資源を受けとれる側とそうでない側を区分するマークであった。

この区分けによって、住民たちにアイデンティティ意識が生じ、それが社会的な境界線になり、「我々」とは「我々のもの」と言える資源の権利を共有する人々だという定義がしだいに用いられるようになったのである。(Wallman 1984=1996: 25)

家庭と同様に地域も、構造的資源の枠内で資源を編成する資源システムである。その境界もまた、そのなかで運用される資源に応じて、経験的・分析的に定められるべきものである。LARA 地区では、種々の資源とアイデンティティを共有する、比較的強固な境界が存在しており、それゆえにウォルマンは分析対象となる八家庭について「ロンドンの同じ地域の、同じ界限の狭い領域に集まって住んでいること、すなわち同一の地域システムを共有する部分集合だということ」(Wallman 1984=1996: 46) が成立すると述べている。しかし、これは複数の家庭が集住していることをもって地域システムを共有すると見なしているのではない。あくまで地域システムの境界は経験的・分析的に探究されるべきものであって、着目する資源の種類によって地域システムの境界が変動するような事態もありうる。

こうして資源システムとしての地域の境界が可視化されることには、いかなる意義があるだろうか。森岡の枠組みでは、町内会等によって共同的に意思決定がなされるような生活問題処理の検討は生活様式論の課題であって、個人によって意思決定がなされる場合を対象とする生活構造論の範疇ではないとされていた。しかし、共同的になされる資源の運用を個人ないし家庭の外部要因として切り離してしまっただけでは、個人ないし家庭の生活を正確に理解することはできない。町内会のような存在が一定の役割を果たしている場合には、とりわけそうである。個人ないし家庭の資源への意味づけと、地域としてなされる資源の運用が対立することも想定できる。こうした事態の分析が、地域を家庭と同様に資源システムとして捉えることによって可能になるのである。

地域という資源システムを分析対象とする場合でも、先述した資源の管理者という視座が有効である。ある資源を管理しているのは誰か。その資源を動員しているのは誰か。管理・動員はいかなる認識や評価をともなった過程としてあるのか。家庭という資源システムのみならず、地域についてもこうした問いを立てることで、資源編成の過程をよく理解できるだろう。個人や家庭と地域とのあいだに資源の運用をめぐる葛藤が生じるとすれば、その要因を地域における資源の管理者の、資源に対する意味づけに見出すことができる場合が多いと考えられる。

こうしてみると、資源の管理者という視座は、先に見たパールのアーバン・マネージャーという視座を、資源システム一般にまで拡大したものとも捉えられる。アーバン・マネージャーは、都市という資源システムにおいて資源の管理を担っているのである。

ここまで準備した視座により、生活を家庭や地域、さらには都市といった資源システムの重層として分析することが可能になる。森岡の枠組みでは、資源への意味づけの水準は個人と「社会」の二つのみが想定され、前者が社会財、後者が社会的資源と概念化されていた。資源システムの重層という視座は、森岡においては「社会」として一括されていた意味づけの水準を分節化し、分析の俎上に載せることを可能にする。そのさいに必要なのは、各層の資源システムを明示的に区別しながら分析することである。

資源選択のありかたは、地域、近隣集団、家庭という限られた場所のレベルと関連しており、そこで生じているさまざまなことからのコンテキストの中でのみ理解される。あらゆるできごと、態度、行動などはどれもいろいろな解釈ができるから、レベルごとのコンテキストによる違いをつねにしっかりと踏まえておく必要がある。(Wallman 1996: 2)

コンテキストを異にした資源システムの重層を、人々は生きている。ウォルマンの視座は、資源システムの境界を徹底して可視化するものだった。森岡の枠組みでは、個人（および個人と同一視された世帯）のみが分析対象となっていたのに対し、境界をもつ資源システムの重層に着目する視座では、資源への意味づけをめぐる、資源システム間の葛藤を含むダイナミズムを捉えることができるようになる。

## 4 結論

これまで、財やサービスを認知し生活のなかに取り込む過程における問題を、資源概念を用いて捉える研究枠組みを構築するという問題関心のもと、論を展開してきた。本節では結論として、まず本稿がいかなる問いに答えてきたのかをまとめ、構築された研究枠組みを提示したのち、財やサービスをめぐる今日の問題をいかに捉えなおすことができるのかを述べる。

英国における都市の衰退と貧困を端緒として発展した資源配分論は、都市を国家や体制のなかで理解しようとする新都市社会学の潮流の一部として受容されたこともあり、その議論をミクロな都市生活と結びつけようとする方法論的検討がなされないままになっていた。そのため、資源への意味づけと生活への取り込みの過程における困難を分析することができない。

森岡清志の都市的生活構造論は、資源への意味づけを明確に問題化した点で評価すべきものであった。しかし、当時のコミュニティ形成論的な問題意識の制約を受け、人々はどのような問題の処理を相互扶助に頼り、どのような問題の処理を専門機関に頼るのかという選好パターンの記述が課題とされた。結果として資源への意味づけの過程は理論的にも経験的にも問われないままとなっていた。個人と世帯、また個人・世帯と地域との関係を問うための視座がないこと、「選択」や「選好」への強い焦点化も問題であった。

これらの課題を克服するため、サンドラ・ウォルマンの論考に着目し、研究枠組みの構築を試みた。ウォルマンが資源概念を拡張し、「編成的資源」概念を導入したことは、本稿において評価すべき第一の点である。パールの資源配分論が、資源（ウォルマンの概念に従えば構造的資源）の配分による生活機会の拘束を主題としていたのに対し、ウォルマンの編成的資源が指しているのは、そうした拘束のなかで生活を組み立てるための認知的な資源のことだといえる。ここにおいて、資源配分論とミクロな都市生活を接続するための枠組みが準備できる。そして、森岡の都市的生活構造論においては問われないままになっていた資源への意味づけの過程を捉えることも可能になる。生活への認知や構えを編成的な「資源」として概念化することにより、その蓄積の過程を問うことができるようになっていく。ウォルマンの用いた調査方法も、その解明に適したものだ。

ウォルマンの議論のうち、本稿において評価すべき第二の点は、「資源システムの境界の可視化」である。ウォルマンは家庭や地域を資源システムとみなし、その境界は分析的・経験的に探究されるべきものだとする。このことで、資源システムの境界が可視化される。家庭や地域は、流動的な境界を持ち資源の管理者を有する資源システムとして捉えられる。この視座により、森岡の枠組みにおいては可視化されなかった、資源システム間での資源への意味づけ・動員をめぐる葛藤といった事態が可視化される。そして生活を、それぞれ別のまとまりをもった資源システムの重層のなかで捉えることが可能になる。生活という過程を、資源の意味づけと運用のダイナミクスとして理解することができるようになる。

こうして、ウォルマンの論考を媒介として、新都市社会学が着目した都市の資源配分と、森岡が着目した個人の資源に対する意味づけが接続された。ここにおいてウォルマンの視座・概念群は、マクロな資源配分とミクロな都市生活を接合する、メゾレベルの理論としての意義を有していた。最終的に提示されたのは、人々が認知的資源を生活歴のなかで形成し、財やサービスを生活の中に取り込むことで成立している生活という過程を、資源配分による一定の拘束と、資源システムの重層のなかで捉える、という研究枠組みである。

こうして、はじめに述べたような、財やサービスを自身の生活のなかに取り込み活用する過程における困難を、一貫して論じるための枠組みが整った。生活困窮者支援や処遇困難事例といった問題が意味しているのは、構造的資源をいかに配分していくかという問題に加えて、編成的資源の保有・形成をいかに支援し、保障していくかという問題が前景化してきているということなのである。構造的資源が配分の対象となるのに対して、認知的な資源である編成的資源を配分することはできない。可能なのは、各生活主体が編成的資源を形成できるよう手助けをすることである。配分することのできない編成的資源の保有を社会的に保障

していかなければならないという、困難な課題が表出しているのである。そのなかで、家庭や地域という、個人の周囲に位置しながら個人とは別に編成的資源を形成し保有する存在が前景化している。

個人・家庭・地域を一体的に考えるさいには、家庭や地域がそれぞれ資源システムをなしているという視座が有効になる。資源システムはそれぞれに編成的資源を蓄積し、資源の管理役を有している。そう考えると、家庭や地域が、そのなかの個々の成員の生活を支援するように働くことは自明ではない。だから、たとえば地域が個人の生活をいかに支援しているか、できるかを検討するとすれば、資源システムとしての地域それ自体を考えなくてはならない。地域システムは構造的資源の枠内で、保有する編成的資源を用いて問題に対処する。地域がある個人の生活を支援するためには、そのために必要な構造的資源と編成的資源とを地域という資源システムが備えていなくてはならないだろう。

重層的に存在する資源システムを、切り分けつつ分析の俎上に載せる。そのうえで、人々が配分されている構造的資源と、蓄積してきた編成的資源の両面を捉えることで、生活という過程は理解することができる。そうした分析によって、生活という過程が成立するための条件と、そのために必要な支援のあり方を見出していくことも可能になるだろう。分析を展開していくうえで、都市研究以外の領域、具体的には福祉研究等の領域における資源論と、本稿で提示した研究枠組みがいかなる関係にあるのかを明らかにすることが、今後の課題となる。

## 注

1 住宅へのアクセシビリティの相違は、具体的には以下のプロセスによって生じた。

住宅取得の条件とは、住宅を所有する資金をもっていることであり、融資を得るには、安定した一定水準以上の所得がなければならない。さらにまた、公営賃貸住宅に入居するには「住宅必要度」を行政側が認め五年以上居住していることが条件で、力ある政治グループに属していることなどで一層有利になる。こうした住宅所得の条件を有し、利益を受ける者とそうでない者の間には、同じ経済的階級、同じ移民労働者であっても、生活の豊かさの点で大きな差が生まれる。(西山 1986: 151)

2 武田尚子が指摘するように、パールはアーバン・マネジャリズム論ののち「ワーク論への転回」を果たし、「資源を配分される側の日常生活、生活機会、拘束要因の多様な実態に迫る」(武田 2009: 173) 方向へと研究を進めた。この「転回」後の研究群において、資源配分とミクロな都市生活の接合がいかに図られているかについては、今後検討を要する。

3 同様の批判が、ソーシャル・サポート研究(平野(1998)など)へも可能であろう。

4 サンドラ・ウォルマン(Sandra Wallman)は英国の都市人類学者。現在はユニヴァーシティー・カレッジ・ロンドン(UCL)の名誉教授(Emeritus Professor)である。

5 家庭調査に先立って、LARA地区の446戸を対象とした地域調査がおこなわれている。*Eight London Households*で調査対象となった8家族は、地域調査の対象から選出したものである。地域調査の結果はWallman et al.(1982)としてまとめられ、*Eight London Households*においても必要に応じて言及されている。

6 ウォルマンはさらに、資源の維持と動員が異なる成員によって担われる可能性についても述べている(Wallman 1984=1996: 39-40)。

## 文献

- 平野順子, 1998, 「都市居住高齢者のソーシャルサポート授受——家族類型別モラルへの影響」『家族社会学研究』10(2): 95-110.
- 稲月正, 2014, 「生活困窮をめぐる新たな状況——なぜ伴走型支援が必要なのか」奥田知志・稲月正・垣田裕介・堤圭史郎『生活困窮者への伴走型支援——経済的困窮と社会的孤立に対応するトータルサポート』明石書店, 24-41.
- 井上信宏, 2011, 「一人暮らし高齢者の『住まい』と社会的孤立——『ゴミ屋敷』を通して見えるニーズと社会福祉の役割」『社会福祉研究』110: 113-21.
- 倉沢進, 1977, 「都市的生活様式論序説」磯村英一編『現代都市の社会学』鹿島出版会, 19-29.
- 町村敬志, 1986, 「都市社会の制度的基盤——資源配分の社会過程」吉原直樹・岩崎信彦編著『都市論のフロンティア——《新都市社会学》の挑戦』有斐閣, 100-32.
- Mellor, Rosemary, 1975, “Urban sociology in an Urbanized Society”, *British Journal of Sociology*, 26: 276-93. (奥田道大・広田康生訳, 1983, 「都市型社会における都市社会学」奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために』多賀出版, 16-49.)
- 森岡清志, 1984a, 「都市的生活構造」『現代社会学』18: 78-102.
- , 1984b, 「『生活問題処理』に関する考察——分類枠と行動分析」『人文学報』170: 1-24.
- , 1985, 「社会財の整序と近隣ネットワーク——横浜市緑区における女性の生活」『人文学報』177: 63-102.
- , 2013, 「ネットワーク論と都市社会学」『日本都市社会学会年報』31: 21-33.
- 西山八重子, 1986, 「都市資源の管理——福祉国家の都市自治」吉原直樹・岩崎信彦編著『都市論のフロンティア——《新都市社会学》の挑戦』有斐閣, 134-71.
- 園部雅久, 2001, 『現代大都市社会論——分極化する都市?』東信堂.
- 武田尚子, 2009, 『質的調査データの2次分析——イギリスの格差拡大プロセスの分析視角』ハーベスト社.
- Wallman, Sandra, 1984, *Eight London Households*, London: Tavistock Publications. (福井正子訳, 1996, 『家庭の三つの資源』河出書房新社.)
- , 1996, 「日本語版のための著者の序」福井正子訳『家庭の三つの資源』河出書房新社, 1-5.
- Wallman, Sandra, Ian Buchanan, Yvonne Dhooge, J.I. Gershuny, Barry Kosmin and Mai Wann, 1982, *Living in South London: Perspectives on Battersea 1871-1981*, London: Gower/London School of Economics and Political Science.
- 吉原直樹, 1986, 「現代都市論の新しい地平——シカゴ学派と新都市社会学とのあいだ」吉原直樹・岩崎信彦編著『都市論のフロンティア——《新都市社会学》の挑戦』有斐閣, 2-24.
- , 1996, 「都市空間と国家・市場・福祉」吉原直樹編『都市空間の構想力』勁草書房, 251-79.

(ほりえ かずまさ、東京大学大学院、horie0120@gmail.com)

(査読者 新雅史、林凌)

## **From the Study of Urban Resource Allocation to the Process of Organizing Resources:**

Constructing a Research Framework by Focusing on Sandra Wallman's Battersea Study

*HORIE, Kazumasa*

The purpose of this paper is to construct a research framework for discussing the process of people recognizing goods and services and taking them into life. First, I examine resource theory in urban sociology. This clarified that existing frameworks cannot connect resource allocation with everyday life and capture the process of people giving significance to resources. To overcome these problems, second, I examined the study by British urban anthropologist Sandra Wallman. As a result, the concept of “organizing resources” and a method for visualizing the boundary of a resource system were identified. Finally, I present the research framework. While considering restraints by resource allocation and multi-layered resource systems, the process of life is understood as people accumulating cognitive resources and taking in goods and services into their lives.